
そして、君の声が響く / 沖神 / 3Z

いとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、君の声が響く／沖神／3Z

【Nコード】

N6844I

【作者名】

ひとり

【あらすじ】

何処からか聴こえて来た唄。その唄が気になって、公園に行くと彼女に出逢った……

第1章…逢…（前書き）

ご注意

この作品は、沖神ですが、本編とは全く違う内容になっており、ストーリーに合わせてキャラも変わる場合があります。
以上の事が苦手な方は、クリアボタンを押して頂く事をお勧めします。

第1章…逢…

凄く綺麗な空だった。

赤色と朱色が溶け合っている夕方の空を見ると、心が落ち着く。

いつもと同じ家までの路地を1人で歩いていた。

学校が終わり、帰る頃にはいつも疲れて、足取りは重い。

学校に行つて、勉強して、家に帰って、…いつも同じ事の繰り返しに、いつの日からか嫌気がさすようになった。

—…何か、変わった事は起きないだろうか？

そう思っていた時に、ふと、何処からか声が聴こえて来たのだった。

――…唄…？

無意識に耳を傾けていた。

澄んでいて、綺麗なソプラノの声。

日本語ではないが、凄く気持ちが伝わって来る。

ゆっくりとしたリズムを刻むその唄は、今日の夕方の空に良く合っていた。

――…何処から？

声の聴こえる方向を頼りに歩き出す。

実際、俺は唄に興味なんてさらさらなかった。

けれど、何処からか聴こえるこの唄は、何故かとても気になって仕方なかった。

―…一体、誰が歌っているのだろうか、それは何という唄なのか…。

いつの間にか、胸は好奇心でいっぱいになっていた。

少し歩いて、さっき既に通り過ぎた公園へと着いた。

―…公園から聴こえる。

少しかいた汗を手で拭い、公園に入った。

するとそこには、1人の女の子がいた。

横に2つまとまっている、淡い桃色の髪。

細身で、透き通るような白い肌。

間違いなく、彼女が歌っているのだった。

ジャリ…

「……」

俺の足音に気付いたらしく、彼女は歌うのを止め、俺の方を見た。

横を向いていたから、気付かなかった。

声だけではなく、凄く綺麗に澄んでいる碧色の大きな瞳だった。

それが俺を捉えていた。

「……あ、わりイ。邪魔するつもりはなかったんでさア……。」

「……………」。

黙って此方を見ている彼女の顔は無表情だった。

「……それ、何て唄？」

そう聞いたのを無視して、彼女は公園から出て行った。

それをただ見届ける俺。

「…何でイ。かわいくねエ。」

心の何処かで、つまらないと思った。

これが、俺と彼女の最初の出逢い。

第2章…運…

昨日の事が忘れられず、彼女の姿が脳裏をかすめる。

「はあ……。」

教室の自席に着いて早々、溜め息が漏れた。

「何朝から湿気ってんだ？」

「うつせー、土方コノヤロー。」

何だか声も情けない。

―…あの女は一体誰なんだろう。

昨日からずっと考えていた。

「…土方さん。」

「あ？」

「あんだ、公園で歌ってる女、誰か知りやせんかい？」

「公園で歌ってる女アゝ！？そんなのただの阿呆だろ。」

「…もう、いいでさア。死ね役立たず。」

「……………テメエ…！」

いつもの険悪なムード。

―…悩んでるより、自分で確かめた方がいいな。

そう思って、今日も放課後に公園に行こうと決めた。

チャイムが鳴り、担任が教室に入ってきた。

今日もダルそうで、見ているこっちまでもがそうなりそうだ。

「はい、静かにー。……テーマらは小学生か？ 静かにしろっつたら、静かにしやがれ。」

そう言い、担任は教卓に両手を付いて、また話し始めた。

「実は、今日から留学生がこのクラスに来る事になった。親の都合で、ー……」

ー……別にどーでもいい。

そう思っつて、青く澄み渡った空を眺めていた。
ー……それより、早く放課後になれ。

俺は早く、心の靄を消したくて仕方なかった。

「……ってなわけで、今は俺の家に同居してる。まだ日本に慣れてないから、みんな仲良くすんだぞー。んじゃ入れ。」

ガラガラ…

戸を開ける音がして、その後に足音が聞こえた。

それでも俺は上の空で、まだ窓越しの空を眺めていた。

「オラ、自己紹介。」

担任の声を聞いた後に、俺は驚いた。

「……………神楽です…。」

—…この声…！

聞き覚えのある、ソプラノの声だった。

バツと慌てて前を見ると、そこには今までずっと、脳裏に浮かんでいた彼女が立っていた。

「…えっ！？」

声を上げたと同時にガタンツと、派手な音がした。

「ん？何だ沖田。お前、神楽と知り合いだったのか？んじゃ、世話してもらったために、神楽、お前は沖田の隣りの席だ。」

「え……。」

「……マジかよ。」

こんなふうに再会するとは思ってもみなかった。

しかも、今日から隣同士。

チラッと彼女を見ると、目が合い、彼女は一瞬、顔を歪ませて視線を逸らした。

—…またかよ。俺嫌われてんのか…？

どうやら、今日の放課後、公園に行かなくても大丈夫のようだ。

こうして、運命の再会は感動する事もなく、直ぐに終わったのだ。
た。

第3章…笑…

ざわざわと騒がしい教室。

雑誌を広げ、数人で読み語っている女子。

漫画を読んだり、プロレスをしたりしている男子。

でも、隣の彼女だけは静かに席に座っていた。

自席に突っ伏して、彼女の横顔を見ながら聞いた。

「…昨日、公園で歌ってたのあんただろイ？」

「…—！」

突然の事で驚いたのか、彼女は微かに反応し、俺を見た。

「……。」

「…お前、何か喋れよ。」

そう言っただけとした。

そっぴや彼女は留学生だった。

日本語を話せるかも分からない。

—…昨日の唄も日本語じゃなかったし…。

そう考えていた時だった。

「……その事は忘れるヨ。」

少し片言混じりの声が聞こえた。

「…何だよ、あんた日本語喋れんじゃねーか。」

「そんな事どうでもいいから、昨日の事忘れるつつってんだヨ！」

キツと俺を見た眼鏡越しの目は、鋭くなっていた。

「何で？」

「別に…、お前に関係ないアル。」

— …『アル』。

漫画の中だけだと思っていた話し方に、思わず吹き出した。

「ははは！ “アル” って初めて生で聞いた！！腹いてえー！」

「…— なっ！？失礼な奴アルな！！口癖なんだから仕方ねーだろ！
」！」

「あー…はいはい。チャイナ口調に激辛女ね。こんな奴があんな綺麗な唄歌えるなんて信じられませんか。」

そう言った瞬間、真っ赤になる彼女。

「その事忘れろって何回言わせんだヨ！？このクソガキ！！」

「お前もガキだろイ。お前のあだ名は今日から“チャイナ”に大決定エー！」

「ださっ！！嫌ヨ、絶対！」

今まで騒がしかった教室が静まり返り、みんな2人を見ていた。そして、

『神楽ちゃんって面白いんだねー！物静かな子かと思ったあ！』

『うんうん！！ちょっと声掛け辛かったけど、全然そんな事ないじゃない！！』

『何だよお前らー、マジで何処で知り合ったんだよ！？』

などと言って、周りに集まって来た。

彼女は最初驚いたようだが、素直に喜んでいた。

その時、俺は彼女の笑った顔を初めて見た。

第4章…謎…

昼休み。

いつものように、俺は同じ場所へ向かっていた。

階段を軽々と上がって、ドアノブを回した。

目の前には一面の青空と、1人の女の子の後ろ姿。

「そんなに此処が気に入ったんですかい？」

「！」

直ぐに振り返る彼女。

「よお。」

直ぐに目を逸らして、また同じ向きに戻った。

「……またテーマかヨ。」

「今日も綺麗な空ですねィ。」

彼女の隣りに並んで、手すりに肘をついた。

彼女が来てから早くも1週間が過ぎていた。

俺との口論がきっかけで、彼女も何とかクラスに馴染んで来たようだった。

一応、彼女の世話係として、いつも彼女を見ていた。

教室での彼女は静かで、誰に対しても優しくかったけれど、俺にだけは何故か敵意剥き出しだった。

「…オイ、何で隣りに来んだヨ。」

「別にいいだろイ。」

彼女を見ていて気付いた事があった。

それが、こうして昼休みにいつも屋上に行く事だった。

何でかは知らない。

聞いたところで、きっと教えてもくれないだろうし…。

「……チャイナに初めて逢った時も、綺麗な空でしたねィ。」

「…覚えてないアル。」

「……なあ、」

碧色の大きな瞳と目が合う。

「あの唄…歌って下せィ。」

「…！」

―…本当は凄く気になっていたんだ。

あの日、君と出逢った時の唄を…！。

けれど、俺の願いも虚しく、彼女はまた無言でドアの方へと歩いて行った。

「おい、何でいつも無視すんでイ！」

そう言つと、彼女はピタリと動くのを止めて言った。

「…もう、あの唄は歌いたくないアル。」

ボタン…

「……え……？」

その日は1日中、彼女の寂しげな横顔が、頭から離れなかった。

第5章…惑…

帰宅して、布団の上で仰向けになって携帯を開いた。

アドレス帳で2文字の名前を探す。

彼女が嫌々言いながら、仕方なく交換したアドレス。

まだ1回も電話も、メールもした事はなかった。

彼女のアドレスを眺めながら、今日の事を思い出していた。

『…もう、あの唄は歌いたくないアル。』

—…あの時のあいつの表情は何だったんだろう。

脳裏をかすめる、彼女の顔。

―…何か…、あんなかな。

そう思って、少し困惑した。

「……………何だこれ。」

彼女が来てから、彼女の事ばかりを考えている自分がいる。

気が付くと、目線の先にはいつも彼女がいて、目で追うようになっていた。

自分で言うのも何だが、自分は女子に結構好かれていて、告白

も何回もされた。

いつも相手が自分を見ているから、自分が相手を見るといふ事はした事がなかった。

けれど、今は逆。

相手が自分を見ずに、自分が相手を見ている。

初めての事だった。

「あー……。」

枕に顔を突っ伏して、溜め息混じりに言った。

「……マジでか。」

…どうやら、俺は君に恋をしたようです。

第6章…想…

「何だヨ、テメー。」

朝、登校して自席に着くと、自分より早く来ていた彼女に話し掛けられた。

一瞬、胸が高鳴る。

彼女から話し掛けられたのは初めてだった。

「…何でイ？」

「ふざけんな！！これアル！」

そう言って、目の前に何かを突き出された。

彼女が持っていたのは携帯で、画面には

“馬鹿チャイナ”

と書かれていた。

――あ。

そつえばすっかり忘れていた。

昨夜、携帯と睨めっこをして、彼女に送るメールを考えていた。

理由は単純で、ただ学校以外でも、彼女と繋がりがかったからだっ
た。

自分の気持ちに気付いてからというもの、変に意識してしまい、結
局皮肉な言葉を送ってしまったのだった。

「本当の事だろイ？」

「んな事で何でいちいちメールすんだヨ！？…せつかくの初メール
…！」

そう言いかけて、彼女は慌てて自分の口を手で塞いだ。

「…じゃあ、何てメールすりゃあ、よかったんですかい？」

微笑して彼女に聞いた。

「しっ…知らないアル！自分で考えるヨ！」

そう言って、彼女は顔を真っ赤にして逃げて行った。

『せっかくの初メール…』

彼女の言葉と真っ赤な顔を思い出して、思わず顔がにやける。

「…何て、送って欲しかったのかな…」。

携帯を開いて、文字を打った。

『ねー、沖田君。』

メールを送信したのと同時に、目の前には2人の女子がいた。

『この問題分かんないから教えてよー。』

『今日、授業であたるんだー。』

普通の子には好かれている。

『そんなの自分で解いて下せー。』

『えー！。』

―…そんな事はどうだっていい。

彼女の方を見ると、大きな碧色の瞳と目が合い、やっぱり直ぐに逸らされた。

―…ねえ、君は

彼女がメールが来た事に気付き、携帯を開いた。

―…俺の事を

慌てて俺の方を見る彼女。

携帯の画面には、さっき俺が送った、

“ごめん”

の3文字。

——…どう思ってる？

第7章…初…

隣りでこっくりしながら授業を受けている彼女。

毎時間のように居眠りをしている。

ハッと気付いて起きるも、また直ぐに寝てしまう。

その姿を見て、俺はいつも微笑していた。

先生が見ていない隙を狙って、目を瞑っている、彼女の白い頬をつつく。

「おら、起きろイ。」

ピクリと反応して、ゆったりと大きな瞳を開く。

そして、ハッとして頬に手を当てながら、彼女が俺を見た。

「ばーか。」

「ーなっ
…!!」

赤面して、また彼女は前を向いた。

彼女が来てからは、毎日が凄く楽しくて、時間はあっという間に過ぎて行った。

顔を合わせる度に喧嘩した。

屋上に行っては、互いに罵り合った。

けれど、何処か楽しくて仕方なかった。

それはきっと、俺が彼女を好きだから。

――アイツはどう思っているんだろう。

でも、日々、彼女と過ごすようになって、段々気付いて来た事があった。

ある日の放課後、教室には俺1人だった。

彼女の机を見ると、鞆がまだあったので、どうやらまだ帰っていないようだった。

俺はというと、別にチャイナを待っているのではなく、別の女子に

呼び出されていた。

―…だいたい、予想は付くけど…。

そう思ったのと同時に、声を掛けられた。

『…沖田君。』

彼女とは違う、ソプラノの声。

暴言を吐く彼女とは違って、落ち着いている子だった。

―…ヤバいな。

こんな時さえも、彼女の事を思い出している。

『急に呼び出してごめんね。……あのね、あたしずっと前から、
沖田君の事好きだったの。』

赤面しながら、俺への想いを述べる女子。

『良かったら、あたしと付き合ってくれないかな……？』

今までの俺だったら、適当に返事を返していた。

でも、今はちゃんとした理由があるから……、

「俺は……」

バサバサ……

そう言いかけた時、後ろから物が落ちる音がして、振り返った。

そこには1人の女の子。

「チャイナ……!？」

彼女の足元には、図書室から借りてきたのだろう、本が数冊落ちていた。

目が合うと、また彼女は逃げ出した。

「待てよ！！」

そう言って、自分も教室から飛び出した。

『沖田君！？』

告白してくれた女子の声も聞かずに、廊下を走る彼女を必死に追い掛けた。

「おい！チャイナ！！止まりやがれ！！」

「ついてくんなヨ!!馬鹿!!」

段々と短くなる、彼女との距離。

手を伸ばして、必死に逃げる彼女の手を掴んだ。

「……ッ!? 離せヨ!!」

「嫌でさア。」

やっと止まった彼女は、それでも俺の手を外そうとしていた。

「何でついてくんだヨ！？教室に女の子待ってるアル！早く行けヨ
」

「あんたが逃げるからだよ。」

――本当は、気付き始めていた。

「当たり前アル！……邪魔なんかするかヨ。」

そう言い終わると、諦めたのか、彼女の力が抜けた事に気が付いた。

「チャイナ……」

「…君は、

「俺の事、好きなんですかい…？」

そう聞くと、ビクッと彼女は反応した。そして、

「…は！？テメーの事なんて嫌いだヨ！！自惚れんな！」

「だったら、こっち見て言っ下せイ…。」

前を向いている彼女の肩を掴んで、自分と向き合わす。

「…やめ…ッ!」

やっと見た彼女の顔は真っ赤で、大きな碧色の瞳からは大粒の涙が流れていた。

「…チャ…」

少し驚いて、そう呼び掛けたのと同時に、彼女が声を出した。

「もうヤダ…、もう嫌アル。何で私ばかり…。お前と逢ってから、私の気持ちはぐちゃぐちゃアル!…どうせ、また笑うんだろ?早く笑え…」

自棄になる彼女を抱き寄せて、口を塞いだ。

「――…ッ！」

俺の肩に置いた彼女の手には、段々と力が入っていく。

「…ヤダ…！」

顔を逸らした彼女を、また自分と向き合わせて、深く口付けた。

「んう…ッ…！」

隙間から漏れる彼女の息と声。

腰が砕けてしゃがみ込む彼女を追う。

彼女は微かに震えていた。

唇をそっと離して、また抱き寄せた。そして、

「俺は、神楽が好きでさア。」

初めての告白をした。

「…神楽は？」

彼女は俺の腕の中で泣きながら、小さな声で言った。

「…………好き。」

「この日は初めて、互いの気持ちがわかった日だった。」

第8章…唄…

目の前には愛しい後ろ姿。

「かーぐーら！」

呼ばれて振り返る彼女の頭を狙って、雪玉を投げる。

ボスッ

「痛…ッ！！」

雪玉は見事、彼女の頭に当たった。

「命中！」

そう言って、微笑する自分。

「…ッのヤロー!!」

完全にキレた彼女は、そう叫びながら俺目掛けて雪玉を投げてきた。

彼女と付き合ってから、初めての冬を迎えた。

今年はいつもより冷えて、寒くて仕方なかった。

「うー。寒いアル……。」

雪合戦を終えて真っ赤になった手に息を吐きながら、彼女はそう言
った。

「ん。」

彼女に手を差し伸べる。

「……何だヨ？」

「仕方ねえから、手え繋いでやりまそア。」

「……ふん。」

ぶつぶつと文句を言いつつも、手をとる彼女。

頬は淡く染まっていた。

「冷てえ…。」

「誰のせいだと思ってんだヨ！」

付き合ったとはいえ、大して変わった事はあまりなかった。

今まで通り、毎日喧嘩するし、罵り合うし。

でも、この変わらない関係に少し安心感を覚える。

意識し過ぎて、前よりつまらない関係になったら嫌だから…。

だから、このままが丁度いい。

「総悟。」

「んー…？」

「肉まん奢れヨ。」

「……はいはい。」

隣りにいつも彼女が居てくれれば、それでいい。

*
*
*

久しぶりの公園。

彼女と逢って以来、全く行っていなかった。

ブランコに座って、あの日の事を思い出す。

「そういえば、ここで逢ったんでしたねイ。」

「そうアルネ。」

「まさか、付き合う事になるなんてなア…。」

「……何だヨ、嫌アルか？」

そう言った彼女の顔は、寂しげだった。

「全然。」

また俺は微笑して、彼女に聞く。

「心配した？」

「……！」

赤面する彼女。

どつやら凶星のようだ。

「心配なんてしてねーヨ！」

「……本当、素直じゃないなあ。」

まあ、そこが可愛いんだけど。

隣のブランコに座っている彼女のもとに行って、軽く唇を重ねた。

「……な。」

さらに赤面する彼女。

「何するアル……！こんなところで……！」

「別に。したいなー、って思っただけでさア。それに、誰もいねえし。」

「バカ！」

自分の座っていたブランコに戻って、空を見た。

あの日と同じくらい、綺麗な空だった。

あの日聴いた唄が、また頭の中で再生される。

「あの時の唄、すげー好きだった…。」

そう言うってから、ハッと気付く。

—…そういえば、

屋上での、彼女の言葉と表情を思い出した。

“……わりイ。”

そう言いかけた時だった。

聴き覚えのある旋律が、耳に入った。

彼女が、歌っているのだった。

あの日と同じ唄。

ゆったりとしたその唄は、やっぱり今日の空にもピッタリだった。

少し歌ってから、彼女は歌うのを止めた。

「かぐ…」

名前を呼ぼうとした俺の声を、彼女の声が塞いだ。

「…この唄は、マミーが生きていた時によく歌ってくれた唄アル。」

「え…。」

「私も好きだったから、直ぐに覚えて、マミーと一緒に歌ってたアル。だけど、マミーが死んで、この唄を歌うと悲しくなるから、今まで歌わなかったアル。」

「…じゃあ、何であの日歌ってたんですかい？」

寂しげな彼女の横顔。

「あの日は、家族がバラバラになったから…。」

「…だから、彼女は日本に来たんだ。」

思わず彼女を抱き締めた。

「…総…悟？」

「……俺がいるだろイ？もう、寂しくなんてさせないでさア。」

涙で滲む、彼女の大きな瞳。

「……当たり前アル。」

初めて知った、彼女の過去。

初めて知った、彼女の痛み。

でもこれからは、少しずつ彼女の痛みを分かち合って行きたい。

「……神楽。」

腕の中で泣く、彼女に話し掛けた。

「その唄、俺に教えて下せイ。」

「へ…？」

「俺が、一緒に歌ってやりませア。」

「だって、日本語じゃあ…」

「覚える。」

泣き顔の彼女と向き合う。

「俺にとってこの唄は、お前と出逢えた、大事な唄なんだ。神楽にとってだって、母さんとの大事な唄だろイ？だから、大切にしたいんでさア。」

また、彼女の目から涙が溢れた。

「うん…ッ。」

そうして、彼女が落ち着くまで抱き締めていた。

彼女と痛みを分かち合う事で、少しでも彼女を楽しませてあげたかつ

た。

—…そのためなら、俺は何でもするよ。

*
*
*

彼女の家、もとい、担任の家への帰り道。

すっかり泣き止んだ彼女に聞く。

「何て名前？この唄。」

「……知らないアル。」

「は？」

「マミーが歌ってたから。」

「……成る程。」

「んじゃあ……、“大事な唄”で決定。」

「……まんまじゃねえかヨ。」

「うっせ。」

「……自分でもそう思う。」

「総悟、唄下手そうアル。」

「黙れ!！」

そう言うと、彼女は笑い出した。

やっぱり、彼女には笑顔が1番似合う。

彼女が笑えば、自分も楽しくなるから…。

それからというものの、俺は彼女に唄を教えてもらって、少しずつ覚えていった。

唄は下手だけど、それでも頑張った。

気が付けば、もう少しでクリスマスだった。

―…何か、やるか。…酔昆布？

自分で出した答えに吹き出した。

何を買えば喜ぶか考えていた時だった。

携帯の着信音。

相手はそんなに連絡をとらない女子だった。

あまり理解出来なかったが、一応出る。

「もしもし……」

電話越しの女子の声は震えていた。

『沖田君……神楽ちゃんが……ッ……!』

その後の事は、今でも思い出したくない。

―…ねえ、君と痛みを分かち合って、これからもずっと一緒に生きて行きたい。

それは、我が儘なのだろうか…？

第9章…君…

—…何でこうなっただろう。

泣き喚く女子。

俯いている男子。

目の前には、花に囲まれた彼女。

その顔は至る所に、痣と痛々しい擦り傷。

彼女が、死んだ…。

俺の携帯に電話がかかって来た日の、夕方での出来事だったらしい。

いつにも増して寒かったその日、外に出ていた彼女は、スリッパした車に巻き込まれて即死だったという。

―…何で、彼女なんだよ。

涙も出ない。

ただ、ぼうつとしてその場に立っていた。

「…総悟、しっかりしろ…。」

土方さんが肩に手を置く。

—…どうやって？

慰めの言葉なんて要らない。

どんなに嘆いても、彼女が生き返る事はないのだから…。

「……沖田。」

担任に呼ばれ、小さな小包が渡された。

「これ、神楽からお前にだ。」

「え……？」

「クリスマスに渡すつもりだったんだろ。」

小包には“MerryXmas”と書かれたシールが貼られ、綺麗に包装されていた。

「……大事にしてやれ。」

そう言って、担任は去っていった。

彼女からの初めての、そして最後のプレゼント。

包装を解くと、新品のiPodと1通の便箋。

カサ…

手紙には、歪な文字で、

『これ聴いて覚えろ！』

と、書いてあった。

―…まさか、

震える手で、iPodの電源を入れる。

すると、画面には既に1曲が収録されていた。

『Title：大事な唄』

足の力が抜けて、その場に崩れ落ちた。

イヤホンから流れ始める、大好きだった彼女の歌声。

あの日と同じ、ゆったりとした旋律。

「……ら、……神楽あ……ッ!!」

初めて、目から涙が零れ落ちた。

何で、彼女じゃなきゃいけなかったのだろう。

何である日、あの時間に、事故が起きたのだろっ。

何で彼女は死ななくてはいけなかったのだろっ。

次々と出てくる疑問。

その度に溢れる涙。

もっと、笑い合いたかった。

もっと、触れたかった。

もっと、愛したかった。

もし、この世に神様がいるのなら、雲の上から引きずり落として文句を言いたい。

―…何故、彼女を連れて行ったのか、と。

*
*
*

少しだけ落ち着いた時に、手紙がもう一枚ある事に気が付いた。

見ると、そこには『大事な唄』の日本語訳であろう歌詞が、また歪な文字で書いてあった。

君が悲しいと思った時は、この唄を思い出して欲しい

きっと、君を救ってくれるから

泣きたい時は、沢山泣けばいい

その後は、きっと思い切り笑えるから

いつも君を想うよ

私たちは、この唄で繋がっている

彼女が俺に残してくれた物は大きすぎて、今でも溢れている。

彼女が教えてくれた気持ち、喜び、悲しみ。

そして、唄。

俺はこれからも、それを大切にして行きたい。

俺は、俺なりの人生を、彼女のいる、あの日に負けないくらい綺麗な空に見守られながら、過ごして行きたい。

彼女と出逢えた事で、俺は強くなれたと思うんだ。

*
*
*

イヤホンから流れてくる唄に合わせて、一緒にリズムを刻み、歌う。

『沖田君、それ何て唄？なんか、凄く胸にぐつと来る…。』

微笑みながら答えた。

「俺の、大好きな子の唄でさア。」

君と出逢えて、君と痛みを分かち合ったこの唄は、いつまでも、俺の中で響いている。

第10章…夢…

あれから丁度1年が過ぎた。

俺は、隣りに彼女がいない日々を過ごしている。

彼女の事を忘れる日なんて、1度もなかった。

制服のポケットには、あの日彼女がくれたiPodがいつでも入っている。

―…君は今、どうしてる？

天国でも楽しく過ごしていますか？

彼女が死んでから、俺は彼女が出てくる夢をよく見るようになった。

そして、今日も……

「神楽、久しぶり。」

『この前逢ったばかりアル。』

「そうだった？」

『そうだヨ。』

そしてお互い、笑い合う。

「俺、結構唄上手になりましたぜイ。」

『嘘は大概にしろヨ。』

「嘘じゃねえよ。」

『…じゃあ、歌うアルか?』

「おう。」

夢の中でだって、彼女に逢えると嬉しいんだ。

—…こうして一緒に歌えるから。

彼女が大きく息を吸った。

そして、

君の
声
が
響く

第10章…夢…（後書き）

今まで読んで頂き、ありがとうございました！！

やっと完結です。

裏話を見ると、この話、本当は沖田と神楽が付き合ってハッピーエンド！！…で、終わる予定でした。けれど、いとりがその時に聴いている唄の影響で、突然死ネタに変更。ってな感じです。

ごめんよ、神楽… ♪ ）

まあ、無事に終わったので、良しとします！ ↑

これから投稿した際は、きっと駄作ですが↑、また宜しく願います。

いとり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6844i/>

そして、君の声が響く / 沖神 / 3Z

2010年10月18日08時12分発行